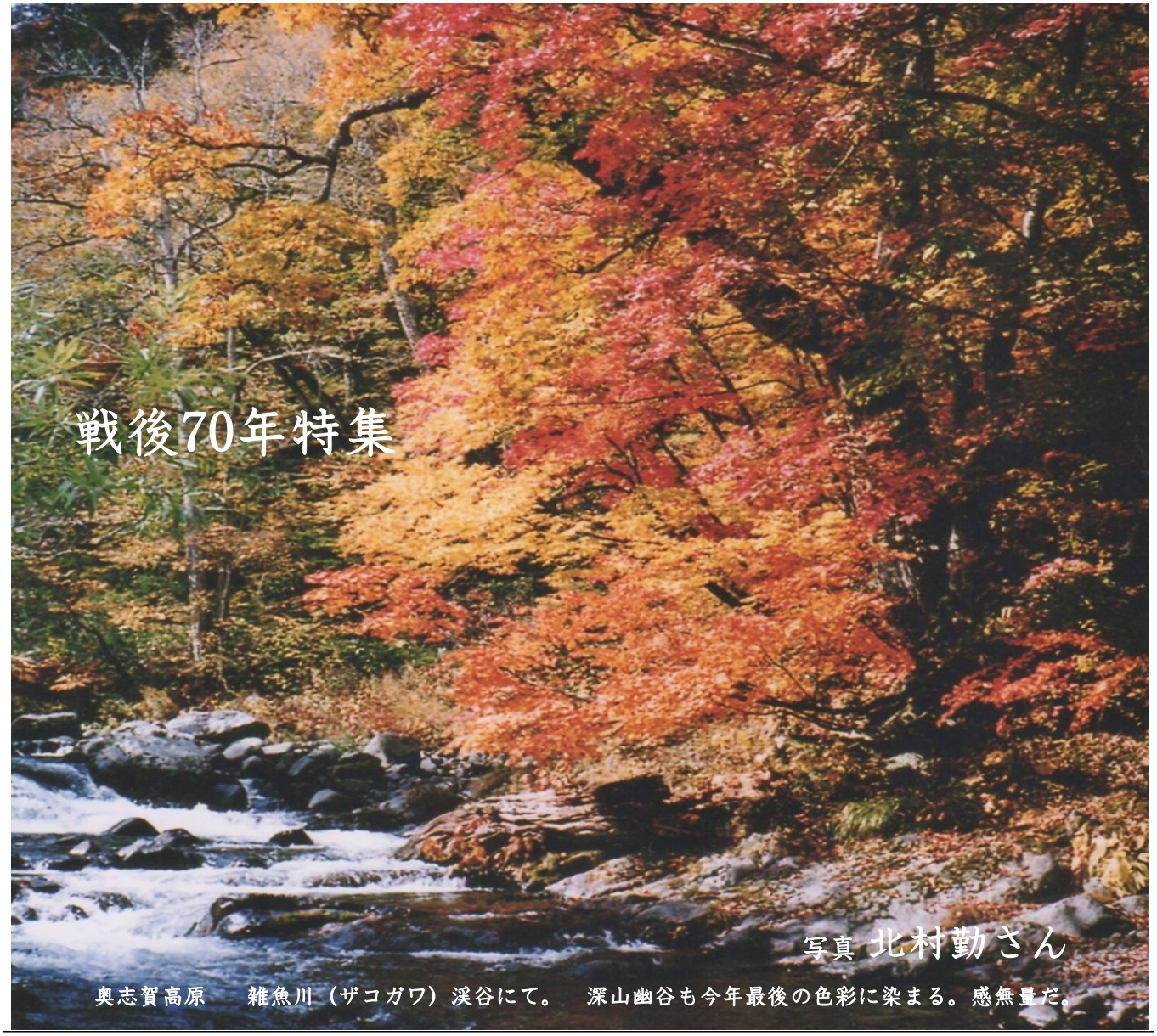
70歳以上の機関紙　シルバーヴィラ向山新聞

秋 銀杏

No.51
2015年11月
1部　20円



戦後70年特集

写真 北村勤さん

奥志賀高原　雑魚川（ザコガワ）渓谷にて。　深山幽谷も今年最後の色彩に染まる。感無量だ。

◆もくじ◆

P２……戦後70年インタビュー特集
「あのとき、私は」インタビュー
P４……戦後70年インタビュー特集
P５……「あのとき、私は」インタビュー
P６……戦後70年特集　シルバー文学館 資料館
P８……インフォメーション

発行：シルバーヴィラ向山・アプランドル向山
〒176-0022 練馬区向山3-7-11 ☎ 03-3999-5416
http://www.silvervilla.com/
編集：花げし舎
練馬区向山3-3-6　☎ 03-3825-0901
http://hanagesisha.jimdo.com/

戦後70年インタビュー特集

あのとき、私は

～平和が普通でなかった時代～

川村傅さん

大正十年生まれ 94歳

１９４１年12月８日太平洋戦争が始まったとき私は在学していた自由学園の食堂にいて朝の６時にラジオの臨時ニュースでそれを知りました。この時は私たち自由学園男子部第一期生の卒業直前だったんです。卒業しないで兵隊に行くのは気の毒だからと先生達が徴兵検査が終わっていた私たち三人だけの繰り上げ卒業式をしてくれたんです。翌年の１月に東京駅に集合して列車や船を乗り継ぎ最終的に蒙古の安北に運ばれ、そこで正式に騎兵14連隊の川巴中隊に入入隊しました。自由学園は文部省によらない教育だったので中学や高校の資格は認められず、二等兵から始まりました。最後は下士官です。

入隊して二週間目にもう出撃しました。特連山という山の麓で凄い戦闘があり大勢の仲間が死にました。私はその血だらけの軍服を脱がし、身体を拭き、洗濯した軍服を着せ、階級章を逆さに付けました。このことを流れ星というのですが葬るときの軍装なんですね。毎日、死と隣り合わせです。

朝、いってまいりますと出て行った人たちが夕方には亡くなっている。私たちは移動しているので亡くなった兵士を仮に埋葬し、後で引き返して焼いてお骨にする。飯ごうには名前が書いてあるので、それぞれのお骨をその飯ごうに入れて背負って歩くんです。ご飯を炊こうにも水がない。やっと見つけた水たまりには死骸が浮いている。それを棒でついて水を汲み飯を炊く。辺り一面、すざまじい異臭がして食欲も湧かない。入ろうと思った塹壕に先に人に入られて自分は物陰に隠れたら、さっき塹壕に入った人が吹き飛ばされて亡くなったり。もうほんの何秒って差で命が助かってきました。普通の神経ではとてもいられない。

自由学園、男子部第一期生入学式

この戦争の経験でたいていのことでは驚かなくなりました。終戦は北京まで上がってきている途中でした。米軍の戦闘機が襲撃にくるのが８月にピタっと止んでおかしいなと思っていたんです。10月に北京に着いて中国人から「日本は負けたんだよ」と聞きました。中国からアメリカの軍艦で日本に引き揚げてきました。あの当時はこの悲惨な現状を受け入れて対処することに一生懸命でした。それじゃなければ生きていけなかったからです。今、私は戦争の語り部として月に一度皆さんに、平和を保つことをテーマに語っています。それが私の最後の使命だと思っています。

インタビュー：藤山フジコ

虎谷豊二さん

大正十年生まれ 94歳

召集令状が来たのは、昭和17年の二十歳の時。僕は府立の工芸学校を卒業し、神田で家業の印刷業を手伝っていた。印刷技術を学ばせて商売に生かそうって親父は考えていたから僕に赤紙が来てがっかりだったと思う。

まず浜松の第七航空教育隊で初年兵の訓練を受けて満州の牡丹江に行き、参謀に言われて幹部候補生の試験を受けた。甲種に合格し、内地に戻り仙台陸軍飛行学校に入学して、厳しい教育を受けた。だんだん空中戦になってきたので、整備隊が必要になったらしく、千葉の下志津飛行学校で整備の教官になった。その後、新設の第百三十八独立整備隊に配属になって、

中国の南京飛行場に行った。2年後、南京から朝鮮へ、さらに京城（現在のソウル）に転進。そんなわけで、どんどん日本に近づいてきて、そこで新型爆弾が落ちた話を聞いて終戦になった。

部隊長が広島出身者で絶望しちゃってね、お前がなんでもやれってことになっちゃった。朝鮮は戦時色がなく日本人が大勢いた。一年は帰れないって話だったので、鐘紡の会社の寄宿舎を借りて使い、部隊のトラック3台から整備機械をおろして、野戦倉庫から小麦粉、砂糖、食用油などを持ち出して積み替えた。そのまま部隊は南下。釜山港で武装解除して博多へ。部隊長が「兵隊を帰してやって」と先に広島に帰っちゃったんだ。

それで、僕が兵隊を全員復員させて、11月には帰ってきた。食料がないので大変でいたら、道で同級生に会った。彼に「闇屋などをやっている」と言ったら、出光に勤めていた彼に「ウチの会社に来ないか」と言われてね。出光は海図をつくるので印刷工場があったんだ。それで印刷の仕事に舞い戻った。「運が良かった」と言われてもしかたがないけど、四年も軍隊にいて戦場にいかずじまい。そんなわけで今、僕は九十五歳でここにこうしてるってわけ。

インタビュー：久田恵

女性たちが出征兵士の無事を祈り赤い糸で結び目を縫いました。虎谷さんの母上は、息子が無事持ち帰ることのできた千人針を大事に保存されていました。

虎谷さんが出征するときにに贈られた寄せ書きが記された日章旗。

工藤澄子さん

父が旧満州の大連の女学校の教師だったので私は大連で生まれました。太平洋戦争が始まった翌年、昭和17年に女学校を卒業し、東京の自由学園の高等科へ入学しました。三年生になると学徒動員で中島飛行機武蔵製作所で旋盤工の仕事をしていました。有名なゼロ戦のエンジンを作っていた工場です。三交替制で働き、11月24日、昼食を食べようとしているとき突然B29の空襲を受けたんです。寮を飛び出し防空壕に飛び込んだときバーン！と爆弾が落ちてきて。やっと静かになって壕から出ると寮の玄関の前は爆弾で大きな穴が開いていました。12月3日に2回目の空襲があってクラスの人が防空壕で被爆して亡くなりました。お棺に入れられた彼女と会ったら顔はとてもきれいだったのだけれど耳から血が沢山出ていて。その姿は今でも忘れられないですね。空襲の度に遠くの畑まで逃げるんだけど上をB29が飛んでいるの。真上まで来れば爆弾を落としてももっと先に落ちるな、など思いながら走るんです。工場は爆撃でボロボロになっていきましたね。

昭和20年に自由学園を卒業して大連に戻りました。まだ戦時中だったので船だったら3泊4日で帰れるのに船では帰れず、朝鮮半島経由で12日かかりました。大連では南満州鉄道の中央試験所に動員され、そこで終戦を迎えました。小さな頃からずっと戦争で育ってきているので戦争が終わることを知って驚きました。ほっとしましたね。

終戦になってから生活はガラっと変わりました。社会が全部ひっくり返ったので。大連にもソ連兵が入ってきて住んでいた家は接収されました。住宅調整運動という日本人の家を中国人に明け渡す運動も始まり布団とお米とちょっとしたものをリヤカーに積んで9回も引っ越しました。そんな中、ソ連軍の司令部が「大連日本人労働組合」という名称の組織を作り私もそこで仕事を手伝うようになりました。今まで読めなかった本や文書を読み始めたら、全く違う歴史を知ることになり考え方も変わりました。その組合の委員長の方から私は大きな影響を受けて今の仕事に繋がっています。二回目の引き上げで日本に戻ってくることができました。その後、自由学園の縁で岩波書店に勤めることになったのです。

インタビュー：藤山フジコ

工藤澄子さん

大正十五年生まれ 89歳

満州から引き揚げてきた女性や子どもたち

戦後70年インタビュー特集

あのとき、私は

～平和が普通でなかった時代～

前田玉江さん

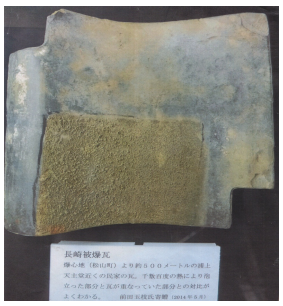
大正十五年生まれ 89歳

私は長崎で生まれ育ちました。太平洋戦争が始まったとき16歳。女学校を卒業して9か月銀行で働いていました。長崎には造船所とか兵器工場とか沢山あったんですね。だんだん危なくなりまして母の里の佐賀県の有田へ家族全員疎開したんです。それが7月でした。

有田で村役場に勤めていたのですが、何か長崎に原爆が落ちたらしい、大変だと。佐賀と長崎は隣県ですが長崎の方を見ると空が赤いんです。佐賀から長崎に徴用された方が沢山いらしたんですが原爆が落ちた翌々日に大勢の方が死亡届を役所に出しに来られました。

原爆で破壊された天主堂の前でのご主人の会社の記念写真。自宅が天主堂の近くにあった為、たまたま遊んでいたお嬢さんも皆さんと一緒に写りました。

長崎で兵器工場に勤めていた二つ下の従妹が被爆したということで何日かたって父が従妹を探しに行きました。被爆して歩けない負傷者は汽車に乗せられ諫早にいたんですね。その列車の中にいる従妹を父が見つけ、足を大けがしてる彼女を乳母車に乗せて佐賀の家族のもとに連れていきました。従妹が生きていたということで、皆歓声をあげていました。でも髪の毛の中、耳の中に小さなガラスのくずが血で固まってしまっているのです。耳の中のガラスを取ってあげようと柔らかい布で一生懸命拭いてあげました。翌々年、家族で長崎に戻りました。私が通った師範学校が浦上にあったのですが鉄筋コンクリートのしっかりした建物がグニャグニャになっていてショックでしたね。終戦はラジオで聞きました。いつも電気を黒い布で覆っていたのですが、それを全部はずしたら家がパーっと明るくなって、それが終戦の一番の記憶です。



第五福竜丸展示館に展示してある原爆で飛ばされた瓦

24歳で国家公務員だった主人と結婚し天主堂の近くに家を建てました。そのとき原爆で飛ばされた瓦が沢山落ちていたんですね。割れていない瓦を記録にと大事にして、転勤の度にそれも持ち歩きました。こちらに入居することが決まりその瓦は第五福竜丸展示館に寄贈しまして現在展示されております。

インタビュー：藤山フジコ

北村勤さん

大正十三年生まれ 91歳

昭和19年、僕は旧制高校在学中に召集されました。入隊は、大阪の陸軍37連隊。その年の11月5日、行先も知らされないまま汽車に乗り博多に向かいました。博多から軍用の船に乗せられ釜山へ。列車の窓から外を見て、ああ、ここ朝鮮だなあ、ここでおろされたらいいなあ、と思ったけれど、瀋陽へ、さらに北京へ。北京から西回りで内モンゴルに入った。何日かかったか覚えていない。兵士たちはみな不安で、どこにいくのかという話ばかり。内モンゴルの宣化でおろされて、トラック一台分づつに分かれ、後はちりじりに。みなどこへ行ったのか全然わからない。

博多からの連絡船には３００人は乗っていたけれど、最後、一人になったなあ、と思った。張家口に、駐蒙軍の司令部があった。僕は、「響」という名の隊に入り、任務は橋の守備。でも、学徒兵だったので、職業軍人になる気はないと言ったのに説得されて幹部候補生の試験を受けた。それが通ったら今度は北京に行って、さらに教育を受けた。そこには２００人ぐらいの幹部候補生が集められていた。数か月後に敗戦になるとは思っていなくて、軍は戦争続行の軍人を育てようと躍起だった。

本土に原爆が落とされ、陸軍新聞に「被害僅少」とあった。兵隊に東大の物理の学生がいて、「僅少なわけがない、これでアメリカの勝ちだ」と言ったのを聞いた。

８月10日にはソ連が参戦し、満州に入ってきて、敗戦になった。僕らは手榴弾を渡され、自決することになっていたが、天皇の「終戦の詔書」で中止になり助かった。

八路軍兵士

それから、蒋介石の国民党に組み込まれ、毛沢東の八路軍との戦いに狩り出された。

その時、初めて戦場に立たされた。そこでは、蒋介石万歳と言って、倒れていった兵士もいた。終戦になったのに、戦死してしまった。こんなふうに、北京にいた僕らは、国民党に、蒙古に残っていた隊は毛沢東の八路軍に取り込まれ中国の内戦に巻き込まれた。ソ連軍に敗れた隊は、シベリア送りになった。それぞれのいた場所で兵士たちの運命が大きく分かれた。

蒋介石は、僕らを４か月で帰してくれた。彼は日本の士官学校を卒業していたこともあって、僕らはひどい目にあわなかった。復員して、大阪に戻ったら京都大学に進学できるようになっていた。戦争が終わり、それからが僕の青春だった。

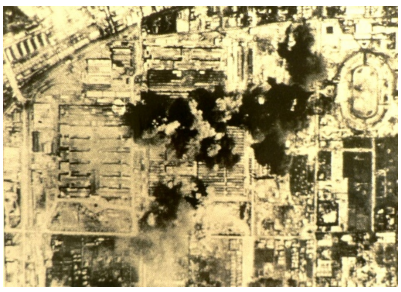
インタビュー：久田恵

岩城祐子さん

終戦の年、田無の中島飛行機に勤めていました。実は、私は日本女子大で物理を学んだリケジョ（理科系女子）。中島飛行機は、当時、東洋一の航空機会社で、有名でしたよ。そこで飛行機のシリンダーとかの材料の定量分析が仕事でしたが、まわりはなにもなくて、風が吹くだけでビーカーにほこりがたまるの。正確なデータを出すなんて無理。鉄が何％とか軍部が喜ぶ数字を出してましたよ。

ともかく有名な会社で空から見てすぐ工場がわかる。空爆は年中よ。敵機が来たらすぐ、防空壕に飛び込むの。それが素掘り。ドラム缶一つぐらいの大きさ。敵機が低空でひゅーんと来て、機関銃で撃ちまくるの。見えるのよ、兵士の顔が、引き金を引くところまで。その撃ってくる方向を音で瞬時に聞き分けて、防空壕の穴の壁のどっち側に身体を張り付けるか判断するの。向うも大変なのよ。穴の中を撃つのはむずかしいの。あの頃は、怖がったら死んじゃうの、平気で敵を見て、敵の来る方向を見定め、穴の壁にひっつかないと。

冷静で度胸がよくなきゃね。怖がりは生き残れない、そういう状況でした。


昭和19年、初空襲を受ける中島飛行機製作所

現会長 岩城祐子さん

大正十三年生まれ 91歳

私の父は、狩りが好きでね、ウサギ狩とかしたのだけれど、まさに、狩で狙われる小動物の心境でしたよ。その後、さすがに父に狩だけはやめてくださいと私は申しました。

女学校の学友と校舎の前で
中央が岩城祐子さん

今、長寿社会なのは、みな、生き残った人だからだと思いますよ。精神的にも強いのよ。悪い環境の中で、碌なものも食べていないから、かえって身体も丈夫なのね。

私もまだ若くて92歳ですが。自分で歩いているし、頑張ってやっていきますよ。そう、怖いものがなにもないのよ～、私。

インタビュー：久田恵

戦後70年特集

シルバー文学館 資料館

あのとき、私は

～平和が普通でなかった時代～

戦後70年特集にあたり、ご入居の皆さまに戦争の記憶を綴っていただきました

あの時の少女

沢田桂子

敗戦後私の一家は、住んでいた韓国の鎮海から釜山を経由して、米国の上陸用舟艇LSTで引揚げたのだが、一千人からいた乗客の中に、十二、三歳くらいの姉と、六、七歳くらいの弟という姉弟がいた。彼らは二人で山口県の父の故郷に帰るということだったが、この姉が実によく弟の面倒を見るのである。弟が船酔いで欧吐した時など、テキパキと処理し、「弟が粗相をいたしまして」と近くの乗客に詫びるなど、よほどしつけがきちんとなされていると思わせられた。

姉のほうはいつも頭に手拭をかぶっていたが、ある時「お姉さんはどこからの引揚げ？」と聞かれたので、「鎮海というところよ。あなたは？」と聞くと、「私は平壌」という。「まあそれじゃ大変だったでしょう」といったら、うなずきながら「平壌からお母さんと弟と三人で、歩いて三十八度線を越えてきたの。お母さんは私たちの目の前でロシアの兵隊に殺されたの。私は男のかっこうをしていたから、男の子と思われたのね」

私は言葉が出なかった。淡々とそう語る少女の顔はあくまで明かるく、みじんのかげりもなかったが、そのことがかえって少女の心に受けた傷の深さを物語っているようだった。頭にかぶった手拭のかげから、一センチくらいに伸びかけた頭髪がのぞいていた。

あの利発そうだった少女は、辛い戦後をどう生き抜いてきただろうか。彼女にもう一度会いたい気がする。

銃後の青春

清原和子

昭和15年4月に入営した兄は第二次世界大戦勃発と同時に中支に派遣された。我が家には脳出血で倒れた寝たきりの祖母と父がおり、生活は困難を極めていた。

食料も衣料も統制され配給になっていた。特に米作りを人頼み（小作）にしていたため一粒の米も納められない事になった。

農家が地主に収める約束だった米は、すべて供出され農家からは、配給米価格の金額が納められる。主食の配給は受けたが、自家用に陸稲（おかぼ）、小麦と野菜は作っていたため、どうにか食いつなぎ懸命に生きてきた。医療費と弟妹の学費で家計のやりくりは大変だった。

今までの生活は、先祖伝来の田畑からの小作料と上納米で成り立っていた。町の殻屋（米殻商）を呼んで、米蔵の米、麦を売るという生活は完全に破綻した。それを助けてくれたのが、少尉に任官していた兄の給料であった。

毎月、陸軍省から郵便局に振り込まれる「七十円十三銭」の何と有難かったことか。

女子挺身隊も免除され、ひたすら家を守った。

昭和20年8月、敗戦と共に家に帰った兄に母が「和子がいなければ、ここまでこれなかった」とほめていたと聞き、それだけで私は満足であった。空襲に逃げ惑うこともなく、特にひもじい思いもせずにすんだとは言うものの、やはり銃後の生活は経済戦争であった。あの頃、日本中のどこかで、私も含め様々な青春を過ごした人がいた事を深い反省も込めて思う。

戦争の記憶　次の世代に伝えたいこと

前田玉江さん

アプランドルにご入居の前田さんは長崎のご出身です。今号の特集でも長崎に原爆が落とされた時の貴重なお話をして下さいました。前田さんはこのことを次の世代の人達に伝えられたらと、介護体験実習に来られる東京家政大学の学生さん達に「女子学生の長崎原爆の記録」を貸し出され、それを読んだ感想を書いてもらっています。その感想の抜粋を掲載させていただきます。

「戦争のお話を聞く機会はめったにないので、このような本を読ませていただき沢山感じることがありました。平和な時代に生まれた私たちには想像もつかないことが起きていたんだと実感しました。どれだけ苦しくて辛かっただろうと考えさせられました。このようなことが二度と起こってはいけないと思います。貴重なお話を読ませていただき有難うございました」

俳句作品

生きて来よ手足失くしてもと母の声
樺太から「これが最後です」女子通信員

大場富子

身にしむや苦難の歴史沖縄に
七十年いくさなき国花木槿

中村美代

終戦忌還らぬ人は夕の星
敗戦忌大御心の空の青

尾池喜代

白米を買い出しに行き栗ひろい
あぜ道に蒔きし大豆のみのりたり

池田ハル

短歌作品

終戦後七十年とふ葉月十五日(なかび)憶ひ新たなり彼の世のひとり
生命あらば尋ねゆかむと誓ひてし君玉砕の島へ天皇(みかみ)の行幸

川村貴美

夫逝きて母より長い華をみて余りに遠い微かな旅愁
いのち重く我が子倒れて今さらに悲哀せまりて祈りいる我

青柳八重子

田舎の家を閉めて
次の夏にまた会ふことの叶はぬか高き棟見上げ別れ来にけり
うつろなるドアを閉めたり若かりし家族の声の家にひびかふ

坂本英子

この町に立ち寄りてふと思い出す千人針を縫いし日のこと
お互いの愛たしかめず征(ゆ)きし人二十歳(はたち)のころの深き悲しみ

清原和子

イベント

メゾフォルテ吹奏楽団サマーコンサート

メゾフォルテ吹奏楽団の皆さん

7月12日（日）メゾフォルテ吹奏楽団の団長、佐藤さんをはじめとする、20名の団員の皆さんが猛暑を吹き飛ばす迫力あふれるコンサートを開いて下さいました。（左）

7月26日（日）川原井泰江さんと門下生の皆さんの爽やかなコンサートが開かれました。相澤京子さんの伴奏で歌とピアノの楽しいコンサートになりました。（右）

第二回 みんなで楽しく音楽会

川原井泰江さんと門下生の皆さん

第四回 ビタミンミュージックコンサート

左、門田あゆ子さん　右、末淳子さん

8月2日（日）ソプラノ歌手の末淳子さんとピアニスト門田あゆ子さんによるビタミンミュージックコンサートが開かれ、入居の皆さんも一緒に歌われ楽しそうでした。（左）

9月12日、13日の両日、玄関前で「ワッショイワッショイ」の掛け声が。向山町陸会による御神輿と山車が見えてくると入居の皆さんは手を叩いて歓迎されました。（右）

向山町のお祭り

神輿を担ぐ子ども達

川原井泰江コンサート

左、植田さや香さん　右、川原井泰江さん

10月18日（日）今回で27回目となる川原井泰江さん、ピアノ植田さや香さんがいらして下さり懐かしい歌を沢山披露して下さいました。（左）

10月28日（水）向山小学校学童クラブの子ども達59人が思い思いのハローウィンの仮装をして様々なレクレーションや歌をを披露してくれました。（右）

向山小学校学童クラブの子ども達のハローウィン

向山小学校学童クラブの子ども達

編集後記

今号の表紙は編集委員の北村勤さんの写真を掲載させていただきました。奥志賀高原で撮影された紅葉の写真は秋号にピッタリでした。有難うございました。

戦後70年特集では、入居の皆さんにご協力いただき感謝申し上げます。虎谷豊二さん、前田玉江さんには貴重な資料を撮影させていただきました。皆さんのインタビューや寄稿していただいた原稿を通して戦争をもう一度学び直しました。私自身がとても勉強になった秋号になりました。

花げし舎：藤山フジコ

今回の取材は衝撃的でした。八，九十代の皆様にとって、戦争の時代を生き延びることがどれほど大変なことだったかを改めて思い知りました。字数が限られていて書き切れませんでしたが、当事者でなければ、知りえない貴重な事実や、深い思いを聞かせていただきました。若い世代に、語り継いでいかねばならない責務があることを、忘れずにいようと思いました。

花げし舎代表：久田恵